



特別賞 三省堂書店賞

書評 岡倉覚三著 村岡博訳 『茶の本』 (岩波書店, 1984) (791/14//H)

政治経済学部4年 小池悠輔

本書は1906年にニューヨークで出版されました。著者は岡倉覚三。当時の日本を代表する知識人であり、東京美術学校(現・東京藝術大学)の設立及び、ボストン美術館の中国日本美術部の顧問を務め、日本の美術研究の開拓と西洋-東洋の「美」の架け橋をつくるべく奔走した人物です。

本書も「茶道」に関する閑談やエピソードを通じて、日本の「老荘」と「禪那」の奥深さを西洋人に理解してもらおう事を目的としています。またその背景には当時の西洋人が自分たちの優越性を信じて疑わず、日本や東洋の文化に対して歩み寄りを見せなかったという事実がありました。

確かに日本の文化はわかりにくい。太閤の天下では、大名たちは金銀財宝よりも壺や茶器の収集に熱を上げ、江戸の町人たちは地味な色の着物を幾枚も重ねることを「粋」と呼んで喜びました。狭い国土の中で肩を寄せ合うように生きてきた我々と、広大な土地を求め大移動を繰り返してきた彼らとでは、愛する対象が違うのも無理はありません。彼らと比べてしまうと、見せびらかすことよりも自省に向かい、絢爛よりも簡素を尊重するわが国の文化は、時に繊細すぎて、確かなものなど何一つないように見えてしまいます。

しかし著者は、そうした不完全なものへの崇拜こそが日本人の「富」なのだと言います。

「諸君は心の落ちつきを失ってまで膨張発展を遂げた。われわれは侵略に対しては弱い調和を創造した。諸君たちは信ずることができますか、東洋はある点で西洋にまさっていることを！」

本書の序章では、そんな強い語気を含んだ言葉が見受けられます。そして日本の庭園がたいてい不均整に造られているのは、不均整は均整よりも多くのもの、広いものを象徴できることを。また簡素な茶室は、かえって無辺の広さと無限の優麗を宿していることを、著者はユーモアと人間味あふれる文章でもって滔々と説いてゆきます。

当時の西洋の人々も、本書を読めばきっと紅茶の煙のかなたに茶湯の香りたつ別天地があることを合点したに違いありません。後に英語のみならずドイツ語、フランス語でも翻訳されたことが、何よりも証拠でしょう。

現代に生きる私たちは、洋服に身を包み、アスファルトの上を歩き、コンクリートの建物の中で生活を送っています。しかしそれは私たちの本当の「富」なのでしょう？生存競争の中で獲得したもの以外の、生まれながらの「何か」を今一度大切にしたいと思うのは私だけでしょうか？

残念ながら、それは数えることもできず触れることもままなりません。お金で買おうにも、どこにも売ってはいません。しかし同時に、誰かに奪われることや失う事に怯える必要もないのです。そんな弱く、はかなく、美しいものの一つ一つを、私たちは真摯に見つめ直すべきではないのでしょうか？皮肉なことに、もともと欧米人向けに書かれた本なのに今では日本人にとっても勉強になる本です。